

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	結の会			
○保護者評価実施期間	令和 7 年 12 月 15 日 ~ 令和 8 年 1 月 10 日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	16名	(回答者数)	15名
○従業者評価実施期間	令和 8 年 1 月 13 日 ~ 令和 8 年 1 月 29 日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7名	(回答者数)	7名
○事業者向け自己評価表作成日	令和 8 年 1 月 31 日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	これまで携わってきた障害児教育などの経験の豊富さから、ノウハウや知識に関しては自信をもっていることがあげられます。支援に関わる手段や手立てなどの引きだしの多さだけでなく、障害に関わる行動面・情緒面などの分析力などにも自信をもって取り組めること。	児童の日常生活での問題行動や支援の伸び悩みなどを、細かく分析しながら次の支援や日々の活動に役立っています。概ね、3か月～1年以上のスパンで遅滞の克服を考えています。そのための支援内容を一覧表にして、職員全体が共有する意システムをとっています。そのためのケース会議はとても大切な会議となっています。	児童の行動の変化や今後必要な力の習得にあたっての支援方法などの分析を、職員間でより深く取り組んでいます。特に落ち込みや顕著になってきた場合、各領域ごとに改善が求められる場合などに、より良い支援法が何か、またどんな支援の手立てがあるのかを、ケース会議の積み重ねという形で、職員一同で日々考えています。
2	ピアノだけに限らず、ギター、バイオリンなどの楽器や音楽分野にある程度知識のある職員が数名いること。また現役の音楽講師も招聘していることなどから、音楽に特化した取り組みができる下地があること。	結の会では音楽関係の取り組みが多く、夏祭り・秋の音楽祭・クリスマス音楽祭と年に3度の音楽への大きな取り組みがあります。事前の打ち合わせでは、職員全体で細かなところまでの打ち合わせができたり、伴奏に関しても特定の職員に重ならないように取り組めています。音楽祭の内容そのものも結構深いところまで話し合いながら取り組んでいます。	児童の音楽性や音楽への関心は、将来的な余暇活動へもつながっていくものであるという考え方から、パート練習だけでなく個人としての楽器の習得にも力を入れることができるようになってきた。ピアノの練習やキーボードの練習などを深めることにより、伴奏がある程度できるようになった児童も出始めています。この取り組みもより大切にしていきたい。

3	創業以来の児童の成長やレベルアップは、大きな強みの一つで、年間の大きな行事にも、子供たちが頑張って取り組むだけでなく、自分たちのイメージを創りながら取り組める力や認知力・思考力が向上してきていること。	子供たちのレベルアップは、自ら作り上げる力や創造力の向上につながってきました。これまでは職員がリードし、また企画まで行ってきた行事も、子供たち主体で考え、計画性を持ったものになってきました。やらされているよりも、自らやる力がどんどんと成長してきていることで、子供たちの話し合いなどの機会も持つことができるようになってきてい	支援者中心の行事の運営や支援から、児童主体の行事であることをより高みに進めていくことを目指しています。方向性が誤っていれば、支援者が訂正しつつの取り組みですが、児童だけの話し合いで、どんな形での音楽祭や行事にしたいかなどを話し合えることもできています。少しずつ、児童の意向をより多く組み入れ、自主的な物をめざしています。
---	--	---	--

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	経済的な点の弱みがまず一番に挙げられます。売上と運営の問題になりますが、児童により良いものを提供しようと考え、やはり難しいのが現状です。備品や行事にかかる予算を確保していくことが難しい現状。	行事に必要な予算を確保することが結構難しい現状です。それは、売上（利益）の薄さということになります。加算もありとることができない、また人件費等の経費が主に占めてしまっていることから、児童の成長につながる行事運営への予算配分が難しい。また、書籍や備品（楽器等）の購入も経済的に圧迫されています。	楽器や備品などは、主に中古品やオークションを利用している購入が、多くなっています。また、善意でいただくこともあります。書籍や楽譜についても同様です。どうしても必要であれば購入していますが、ほぼ、職員や善意の第三者の寄付によるところが多く、自腹も結構あります。改善策は利用単価も改善を待たざるを得ない。
2	学校との連絡や調整などの連携の部分での難しさを感じています。特定の学校や地域資源では、うまく連携ができていますが、概ね学校との関係が難しいのが弱みとなっている。	なぜできないのでしょうか？といつも考えることが多いのが実情です。働きかけても、回答は返ってこないという現状が、続いています。児童の家庭の状態を伝えたくても、聞いてくれない。こちらが知りたい支援の内容と成果は教えてもらえない、ひどい時は職業蔑視ともいえる言葉を吐きかけられるときもある。こちらからの働きかけも難しい現状です。	働きかけは、根気よく取り組んでいます。ただ、ある学校では、職業蔑視ともいえる言葉をはきかけられたり、人格を否定するような言葉が出ることもあり、限界も感じています。
3	国の指針による、会議や打ち合わせが非常に増えてきたことで、職員の負担が非常に増えていることが上げられます。できれば子供のケース会議などの、障害に関する取り組みへの会議などであれば良いが、そちらの会議の時間を咲かざるを得ない。	パート職員も会議の主たるメンバーであり、会議の時間を確保することで、時給も発生します。経済的に厳しい状態の中では、大きな負担となっている。またパート職員に限らず、全職員にとっては、会議の増加が仕事への負担増になっているのも事実です。最も必要な子供たちの支援に関わるケース会議などの時間も削減されてきています。	できるだけ、会議の時間を少なくしていく方向で取り組んでいます。子供たちへの支援に影響が出ないように、職員負担の軽減が大切だと考えています。職員の日々の過重な労働が生み出す弊害を気にしながらの取り組みになっています。